

高齢者の血圧は死期にむかって低下していく

血圧は高齢になると安定した値を維持するのか、それとも次第に低下するのかについては明らかにはなっていない。高齢者の血圧が低下する理由については、加齢によるものか、心不全などの疾患によるもの、高血圧の患者が亡くなったために血圧の低い人が長生きしているように見える、などいくつかの仮説が考えられる。本研究では、これらの仮説を検証するため、60歳以上で死亡した患者の、死亡する前20年の血圧の経過を調べた。

英国のプライマリケアデータベースを用い、2010年から2014年に60歳以上での死亡が確認された46,634例を対象とし(女性51.7%,死亡時の平均年齢82.4歳)、死亡時の年齢に基づき60-69歳、70-79歳、80-89歳、90歳以上に層別化した。結果、どの年齢群においても、収縮期血圧も拡張期血圧も死亡の18~14年前にピークに達し、その後死亡時点に向かって低下した。ピーク時から死亡した年までの収縮期血圧の変化は、60~69歳群では-8.5mmHg、90歳以上群では-22.0mmHgであった。全体の64.0%の患者で収縮期血圧はピーク時より10mmHg以上低下していた。また、死亡の10年前から3年前までは収縮期血圧が直線状に低下し、最後の2年ではより急角度に低下していた。降圧治療を受けていない者でも、死亡の10年前から3年前までは収縮期血圧が直線状に低下していたが、高血圧や認知症、心不全、晩年の体重減少などのある患者のほうが直線の傾きが急であった。

したがって、高齢者の血圧は死亡の14年以上前に最高値を示し、その後は直線的に低下していき、最後の2年にはさらに大きく低下することが明らかとなった。このことは、高齢者の治療のモニタリングや臨床試験のデザインに影響を与える可能性がある。

出典 : Journal of the American Medical Association. Internal Medicine. 2018; 178(1):